
デジモンティマーズ2

eagle.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンティマーズ2

【EZコード】

N6347M

【作者名】

eagle-e.

【あらすじ】

200X年。

東京都西新宿でおきたデ・リーパーによる首都襲撃事件より2年。世界は平和な時代を迎えていた。が、平和は長くは続かなかつた。

新たな出会いと共に止まっていた2年が動き出す……。

初めてして。

e a g I e . です。

この作品が生まれて初めて書く小説となります。まだまだ上手く書くことは難しいですが、よろしくお願ひします。

この作品は私が好きだった、デジモンティマーズの2年後という設定にしています。

オリジナルのキャラクターが沢山できますので、それでも構わないという人はぜひお読み下さい。

空高く浮かぶ空間。

「…………」

何かの声が後方より聞こえる。

それを聞いて一体の青いデジモンが振り返る

「！」の声ついて……まあいな。もつ追いついて来てる。みんな急げー！

後ろを振り返りながら走る七体のデジモンたち。後ろから迫り来る何かから逃げているらしい。

「もうダメ。疲れた。ギルモンこれ以上走れないよ

自分自身をギルモンと名乗った、犬を大きくしたような赤いデジモンがそう言つて座り込んだ。そのギルモンより明らかに体が小さく、自身の体に不釣り合いなほど耳の大きいデジモンが必死でギルモンの腕を引っ張ろうとする。

「そんなこと言つてる場合じゃないんだって。時間ないんだから早く立つてよ」

そう言つてギルモンの腕を引っ張るが全く動こうとしない。先に前を走つていた人型の黄色いデジモンが、ギルモンたちに向かつて叫ぶ。

「何をやつているギルモン！ テリアモン！」

少し怒り氣味に言われたテリアモンは、ムッとなつて黄色いデジモンに向かつて叫び返した。

「なんで僕まで怒られんのや。ギルモンが悪いんだよ」

そう言つてテリアモンは、ギルモンの手を話してみんなを追い掛ける。黄色いデジモンも再び前を向いて走り出した。

置いてきぼりこなされたギルモンが焦つて立ち上がりみんなを追い掛ける。

「テリアモン、レナモン。まつて。まつてよ～～」

「ひゃ～～。おつきいな～」

ギルモンは上をみて、驚いていた。

七体のデジモンたちは大きな扉の前に辿り着いた。上を見上げても一番上がギリギリ確認できるかどうかというほどの大さだ。その扉の前に立つた、体が白く額に黒と赤の三角形のマークが入っているデジモンが、扉を開けようとするがビクともしない。

「ふぬぬぬぬぬ～～。ダメクル。開かないクル」

そう言つて白いデジモンはしょんぼりした。

紫色の犬のようなデジモンが上を向いた後、みんなに意見を尋ねた。

「話には聞いていたけどここまで大きいとは……。びつかぬ?」

「ドルモンのパワーで扉、壊せないかな?」

と、テリアモンが呟いた。黄色いデジモン、レナモンは、一体のデジモンに尋ねる。

「ルナモン。チンロンモンから何か聞いていないか?」

ルナモンと呼ばれた四つの耳がある白いデジモンは、少し考えてから答えた。

「たしか、扉の前まで行けば後は何とかするってチンロンモンは言ったけど……」

その時、眩い程の光が地上から扉に向かってとんできた。

「なんだ!? この光は?」

ずっと後ろを気にしていた青いデジモンが目を擡えながら言った。
その光は扉に降り注ぎ続けた。みんなは、この光がこのまま扉を壊すんじやないかと思った。光はそれほどエネルギーだった。すると、この巨大な扉が少しづつ開き始めた。この光に呆気にとられていたレナモンが呟く。

「これは、チンロンモンの……? すごいエネルギーだ」

あつとこづ間に扉は開ききつた。扉の向こづは七色の光に包まれた不思議な空間が広がっていた。それを見て絶句するデジモンたち。

青いデジモンはみんなに、さあ行こうと言おうとした、その時。

後方より炎がとんできた。すかさずレナモンはマークのある白いデジモン、クルモンを守り、他のデジモンたちも防御体制をとった。幸い誰もケガはなく安堵した。が、安心している場合ではない。振り向くと、ギルモンたちより大きなデジモンが十五体近くいた。

「 もう。ほんと、しつこいな。あっち行つてよ」

と、テリアモンは嫌そうに言つた。

するとその中の一体、赤い体をしたティラノモンが叫んだ。

「 そっぽいから。誰一人として現実世界リアルワールドに行かはしない」

「 誰一人つて、僕たち人じやないし」

と、テリアモンは相手を挑発するよつと言つた。

「 でもこの状況、かなりヤバいぞ。じつする？」

青いデジモンがレナモンに案を求めた。

レナモンは少し考えた後、全員に向かつて言つた。

「 ブイモンヒルナモンとドルモンは、クルモンを連れて先に行つてくれ。ここは私とギルモン、テリアモンで何とかする」

レナモンのその発言に誰もが驚いた。青いデジモン、ブイモンがレナモンに対して反論した。

「 何言つてんだよ。危険だ。俺たちも一緒に戦つー。」

「 ダメだ！！」

レナモンが怒鳴りつけようとした。

「ここで全員で戦つてもおそらく全滅する。だから、自分たちで進化できる私たちが足止めする。その間に早く現実世界へ！」

「そんな……、そんなこと出来ないよ

ルナモンは悲しそうに呟く。ここに残ると「ここ」はかなり危険なことだ。下手をすれば相手にアーリートされるかもしない。だから自分の仲間、友達を置いていくなんて出来なかつた。

するとテリアモンがいつものように明るくマイペースに言った。

「モーマンタイ、モーマンタイ。僕たちは大丈夫だよ。ね？、ギルモン？」

「ん~、ギルモンよく分かんないや。でもギルモンたちは絶対に負けないよ」

そうやってギルモンは頷いた。

「でも……」

なおもブイモンは納得出来ない。もしかしたら、このまま一度と会えないかもしない。表情から察するとおそらくテリアモンとレナモンは覚悟しているんだね。ギルモンは余り分かつてなさそう

だが……。

するとクルモンが耳を広げて飛んだ。

「大丈夫っクル！ギルモンたちは強いクル！」

こんな時でもクルモンは明るい。本当にギルモンたちを信じているんだろう。ブイモンはそう呟つた。

「分かったよ。俺たちはクルモンを連れて先に行く」

ブイモンはそう言つて扉のほうを向いた。

「ブイモン！？」

ルナモンとドルモンの声が重なつた。

「何を言つてるんだ？分かつてるとかブイモン？ここで別れたら……」

…

「そんなこと分かつてる！」

ドルモンの反論はブイモンの言葉こよつて途中で切られた。

「分かつてる……分かつてるよ。でも、ギルモンたちは友達だ……だったら俺はギルモンたちを……友達を信じたい……！」

ブイモンはみんなに向かって、強く叫んだ。その言葉にルナモンが呟く。

「ブイモン……」

「ギルモンたちを信じよう。」

その言葉はルナモンたちにittiingiとこうよりは、ブイモン自身に言い聞かせて入るよつだつた。

「やうよ。そう簡単にレナモンたちがやられたりしないよ。」

頷くようルナモンは言つた。

「分かった。クルモン！」

ドルモンも頷く。そしてクルモンを連れて扉の先へと進んで行く。

「私も！」

次にルナモンが進んで行つた。

ブイモンも扉に向かって行く。しかし、入り口の一歩手前でブイモンは立ち止まつた。そして、ギルモンたちのまつを振り向かずに、

「また……会えるよな？」

と、消え入るような声で尋ねた。

「当たり前じやん。すぐに後を追つよ」

あくまでもいつもビリつの話しかでテリアモンは答えた。

「また後でね。バイバイ」

ギルモンもいつものように無邪氣だった。

「約束する」

レナモンは強く答えた。

その三人の答を聞いて、ブイモンは光の中へと駆け出した。

後ろから聞こえるギルモンたちの進化の声。

それがブイモンが聞いたギルモンたちの最後の声だった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6347m/>

デジモンティマーズ2

2010年10月11日13時02分発行